

昔話

吉田健一

青土社

昔話

©1976, Kenichi Yoshida

一九七六年十一月二十日印刷

一九七六年十二月一日発行

定価——一四〇〇円 1095-400021-3978

著者——吉田健一

発行者——清水康雄

印刷所——東徳

製本所——美成社

発行所——青土社

東京都千代田区神田神保町一—二九 市瀬ビル 下101

(電) 二九二—七〇七六 振替東京九—一九二九五五

装画——井上敏男

吉田健一著

覚書

笛を吹くように文学を語り、鼓のように人生の音を響かせる、爽かな言葉の音楽。

¥1400

詩に就て

〈静寂〉のなかに〈言葉〉のありかをたずね、言葉の〈響き〉のうちに精神を蘇生させる、詩の本質を考える。

¥1400

青土社

昔話
目次

I 9

鷗外の抽齋伝と伊澤蘭軒伝——茶山と蘭軒を結んでゐた友情——インカ族やアズテック族には人間であることの手掛りがない——家康と秀吉の交渉は誠実に即したもの——ジイドが合つたワイルドといふ人間——落日のワイルド

II 29

無神論者ヒュウムと頑固な婆さん——サミュエル・ジョンソンは古本屋の息子——ロオマ衰亡史のギボンは、理性を重んじた十八世紀ヨオロッパの典型——ギボンはルソオの齒に合はなかつた——ナポレオンは理性を信奉した

III 49

西洋の甲冑と日本の鎧の緘し——ワルボオルの嗅ぎ煙草と細木香以の切り餅——ヨオロッパの紋章と日本の紋——ワットオの絵にある無常の姿と平安朝の無常——フロイドと科学と風俗上の問題——断頭台のマリイ・アントアネット

IV 69

文明の風を取入れたエリザベス一世——シエイクスピアの芝居は人間といふものに即して人間を扱つてゐる——モンテエニユの父親の教育法——ラブレエの機知——文明に向ふ動きを推進したルイ十四世——ワルポオルと植木屋

V 89

清少納言の扇——スコット南極探險隊員オオツの死——メツテルニヒと神の声——マルクスといふのはどうにも付いて行けない人間だが——神とともにあるアラビア人——ナポレオンは人間といふ点から見て不思議でならない

VI 109

デメテエルの神話——シュリイマンはホメロスの詩から魔壺を掘り当てた——キュクロプスの羊——ヴィルヘルム二世がドイツ皇帝でないか或は不具でなかつたなら——梶原景季と梅一枝——チャアチルの電報——望郷の形

VII

129

ギリシヤでの人間の觀念——キリストが人間でもあつたといふことがキリスト教の根幹をなす——回教とアラビアの風土——ポオドレエルやランポオには白人種と言つた風な考へは全くなかつた——書を見ざること三日

VIII

149

チャアチルの力量——お禰々の方に宛てた信長の手紙——史記に美談は語られてゐない——支那の文明に就て先ず頭に浮ぶのが詩人、画家、神仙、哲人、或は隱者のこと——封建的といふ重宝な言葉——アブラハム・リンコロンと寄席

IX

169

エリザベス一世といふ人間——私の体は女のも私には王者の心がある——賢い女が一家の家計簿を付けるのに似てゐる——大地は支那でもギリシヤでも女と考へられた——名君である女ならば名妓でもある——女の持久力

X
189

ヨオロッパの精神には物質に惹かれる傾向が強い——ヨオロッパの家並の人懐こさ——暮しがなければ安定もない——ダンテの神曲の地獄も煉獄も人間の世界である——ダ・ヴィンチの飛行機研究の動機——地名に就て

XI
209

町と村での暮し方の違ひ——町にゐて人間は始めて一人でゐられる——町に住むやうになつて漸く人間になつた——テスト氏は村に住む人間でない——町の騒音は静寂の働きをする——バビロン、東京、クノツソス

XII
229

話と思へる程の話は凡て昔話である——鷗外の史伝、菊池貴一郎の江戸府内絵本風俗往来——人間の暮しには持続がある——言葉は人間とともに洗練を重ねて来た——エカテリナ大帝と童の番兵——歴史といふこと

昔 話

I

過去にあつたことは現在では完了してゐるから明確な形をしているといふのは疑つて見れば幾らでも疑へることである。これは過去と言つても或る期間以上がたつてからのことを指してゐるやうで例へばそれが史上に名を残す程の人間ならば死んでから五十年、百年とたつうちにそれがどういふ人間だつたかが動かせないものになるといふ意味に取れるが人間の場合も必ずしもさうとは限らない。寧ろ資料の増加と史眼を備えてゐるものの輩出で時間がたつことは同じ人物の評価、解釈を幾度でも変へるといふことが起り得る筈で現に生前には名君と讃へられた君主がその死後にもう死んだからといふことでなしに暴君の典型と見られるに至つて更に時間がたつてから改めて名君であることが確認されるといふ種類のことは珍しくない。フランスのルイ十四世、英國のチャールス二世がさうであり、これは多少怪しくても秦始皇もその中に入れることが出来るかと思へる。これは君主でなかつた人間に就ても勿論言へることです。そこには流行も他の事物に対してと同様に働く。

併しその他の事物といふことで気が付くのが建物や或は一つの町、或は自然の眺めが年月とともにそれそのものの形を表して、或は獲得してそれ以外のものでなくなるやうに人間や人間が与

つた出来事も時間が経過するうちに流行や歴史家の模索、考証とは別にその性格を明かにして行つて歴史家の探求もそれが有効である為にはこの時間の働きに添ふのでなければならぬとも見られるといふことである。これを誰かがそこにゐたことが確實になると言つてもよくてそれはそこにゐることでもあり、それで過去にあつたことはいふ趣旨と話が逆になるのであるが現にゐる人間と同様に風評や時代の好みがどうだらうとその誰かが紛れもなくそこにゐることになる。又時間の経過で曾てゐた人間が我々にとつて疑へない形を取るのも現存する人間と時間を掛けて付き合ふことでその人間がそれ以外のものであり得なくなるのと変ることとはなくてただ昔の人間がその形を取るのはいわゆる個人的な付き合いを通してであるのにも増してその人間の後に経過した時間の働き、従つてその後代に属する人間との付き合いが絶え間なく続けられて来たことによつてである。

それだけその形が明確であるかどうかは解らない。我々にとつて一人の友達が一箇の歴史上の人物よりも不確かなものに感じられるだらうか。又我々に対するその呼び掛け方も同じであつてその何れにも人間といふものであることを認めるのが我々の心のうちに親密の情を生じる。併しどつちが先だらうと我々の友達とはまだ死に別れるといふことが残つてゐるのに対して歴史上の人物の多くは死んでから久しくて過去の人物の完了とは或はこのことも指してゐるのかも知れない。その人間をどう考へるといふことは別にその人間が自分で出来ることは凡て終つてゐてそ

の上に死ぬといふその為に人間がその一生を送るのだと言へることをしてゐる。確かにその限りではその人間はその人間、或は要するに人間であることを完了してゐてそれが人間らしい人間であるならば、それは少しでも人間であることの味を知つたものならば兎に角死ぬことが自分とつての一切の成就である。それが美しいことであるのが歴史上の人物に就て我々を打つのだらうか。

タメルランは大軍を率ゐて当時の支那の北京に向ふ途中で病氣になると重臣達を集めて長男にもう一度会ひたかつたのだがそれは適はなかつた。北京に向つて進軍を続けるやうに。これが自分の代での最後の謁見だと言つて死んだ。その言葉の調子から察すればタメルランにとつて北京を攻略するまで生きてゐられなかつたのが心残りだつたとは思へない。現にその攻略に向ふ途中で自分だけが先に死ぬのである。その死で遠征が中止になることもタメルランが予見してゐなかつたとは言へない。それまでに築いた版図が中央アジアからインド全土を蔽ふ広大なものだつたといふことでなしにタメルランは死ぬに當つてその一生がそれでよかつたのであつて又そこで終るものであることを認めたのでそれまでの数十年と同様に今も遠征中の身であることにも自分の一生があることから進軍を続けるやうに指図したのである。それから先起ることは自分の死後のことになる。

併し死ぬことで人間の一生が成就するといふのはその一生が一つの完結したものであるといふ

ことでこの性格が會てゐた人間の誰からも離れなくてその線を簡潔にし、それで無駄なものを凡て洗ひ落された人間といふものがそこにあるといふ印象を我々に与へる。これは時間の経過で人間の如何が決定するその働き以上のものと思はれて死んだ為に或る一人の人間がその人間であることはそれが我々以前の時代に生きてゐたその有様にも影響して簡潔に人間であることが一般に歴史上の人物の魅力をなしてゐる。それは死んだからさうなつたのだといふのではない。或はその人間が生きてゐる間にも及んで死ぬことで完結した人間はそれによつて生きてゐる間も完結してゐて我々はさういふ人間がそこにある行動するのを見る。或はただそこに生きてゐるのを見る。凡て優れた歴史家が書く歴史の魅力の大半も、或はその魅力の真髓もそこにあつても形式の上での比較に幾分でもの意味があるならばその点で歴史は小説と違つた形式に属してゐる。

鷗外が江戸後期に澠江抽齋といふ人がゐたことを知つたのは武鑑の蒐集によつてだつた。その武鑑といふのがどういふものであるかに就ては澠江抽齋伝の初めに詳しい。鷗外が手に入れたその武鑑の多くに澠江氏蔵書の朱印が押してあることに始つて鷗外が抽齋の全貌を明かにするに至るその探索には非凡なものがあるが抽齋伝の成立に當つてその鍵をなすものは鷗外がその頃はまだ百年とたつてゐなくても歴史の上では既に遠い昔に属してゐる觀があつた江戸の一時期に自分と同じ好み、或は考へるのがゐたことに興味を惹かれたことである。その蔵書の印から抽齋が現れた。又それは抽齋だけでなくこれを中心にあつて行つてその時代の江戸がそこにあり、そ